


自閉症の特性に応じた自立活動の内容表

自閉症児の自立活動に関する、計画的な般化の必要について
 これまでの自閉症教育では、個々の行動を高める指導は盛んであっても、それが定着していかない現状があった。行動の般化や維持が難しい自閉症児では、指導プログラムの冒頭で将来を見越した視点から計画を十分に検討しておく必要がある。例えば「環境の把握」における「構造化」では、将来予想される環境を念頭において子どもの発達に応じて形を変えていく流れが必要であること。「コミュニケーション」における声かけ等の促しは、依存性につながらないよう慎重に行わなければならないこと等があげられる。計画的な般化によって自閉症児の自発性を高め、社会参加につなげる視点が是非とも必要である。この点について、以下に記載する表の一部として表現しにくい点、表全体を貫く考え方として、改めて強調しておきたい。

健康の保持	<p>自閉症児の健康を阻害する要因として飲食と睡眠の異常がある。これらは現在の生活の幅を狭めるだけでなく、将来的にも身体の発育に影響する重大な問題である。</p> <p>偏食、異食の原因としては過敏性とこだわり行動が考えられるが、それだけでなく、食べられる物と食べられない物を区別する学習のように、通常であれば自然に身につくはずの「食べる」という行為自体の意味理解が必要な場合がある。また、何でも口に入れてはいけないというルールを教え、その後も、自分で思い出ず方法を身につけるといった手続きが必要な場合もある。</p> <p>自閉症児は、感覚の異常やこだわり、見通しが立たないこと等で、日常生活動作の獲得が難しい場合がある。スケジュールや視覚支援など、本人に伝わる方法で行動の仕方を伝え、見通しを持って行えるよう配慮する必要がある。排泄や着替えの指導では、適切な支援であっても、成果を期待して強制的になり失敗するケースがある。リラックスした雰囲気での「楽しい活動」となる工夫が大切である。</p>	
自立活動の指導項目	自閉症の特性	指導内容（配慮と手だて）
(1)生活のリズムや生活習慣の形成に関すること。	<p>飲食、睡眠の異常</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 偏食、異食、過食 <p>生活リズムの乱れ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 排泄習慣の乱れ <ul style="list-style-type: none"> ・ 睡眠の乱れ 	<p>< 支援のポイント > </p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>偏食... 本人の好き嫌いを考慮して、お代わりの方法や嫌いなおかずの量を減らしたり、拒否する方法を獲得させる等の指導がある。 変化への抵抗から来る場合は、一口食べたご褒美に好きなものを一口食べられるという方法で慣れさせる方法もある。こだわりからくる「食わず嫌い」の子どもの中には、形状を変化させるだけで食べることができることもある。</p> <p>異食... 健康面や安全面での心配がある。異食行為そのもので、相手の注意を引こうとする可能性がある。このような場合は、相手の注目が強化子となることがあるので、異食をしても振り返ってくれないことを知らせ、問題行動を消去する手続きが必要である。行動を消去する手続きのなかでは、一時的に問題行動が増える「バースト」と呼ばれる状態になったり、消えていた行動が再び現れる「自発的回復」がみられることがあるが、これらを理解して計画的に行う必要がある。 また、異食の対象に本人の嫌悪刺激を連想させるようにし、注意を向けないようにする方法もある。 いずれの場合も、なぜ異食がおこってくるか生活の様子をよく見直し、望ましい代替行動があれば、それに置き換えていくことが必要である。</p> <p>過食... 自閉症児では、食に関わって行動の自己コントロールが難しいために肥満の問題がおこってくることも多い。食事のメニューについて保護者の啓発を行う等、家庭と連携をとりながら、食事習慣を改善したり、運動のスキルを身につけられるように活動を計画する必要がある。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>排泄... 自閉症児のトイレトレーニングの難しさとして次のような理由が考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ うまく排泄して親を喜ばせるといった動機づけが乏しい。 ・ トイレで何を期待されているかの理解が難しい。 ・ ルーティンの変更を受け入れることが難しいため慣れ親しんだ方法（オムツ等）に固執してしまう。 ・ 内臓感覚や運動感覚等、感覚・運動統合の遅れから、身体的な手がかりの読みとりが難しかったり、音、温度、触覚等の感覚刺激の影響を受けやすい。 <p>また、1つの場所に1機能しか認めていないことがあり、「排泄は家でするもの」と決めてしまっているような場合がある。行動とその場所が1対1関係で理解できるようにする必要がある。</p> <p>排泄行為には、さまざまな身辺処理の能力が必要とされるので、一連の行動を細かい要素に分けて洗い出し、記録を取ってみる。課題分析により、つまづきを特定することが必要である。スケジュールに組み込んだり、排泄ルーティンの各ステップを視覚的に示し、終わったら何があるのかを知らせる等、構造化することで動機づけや達成感が高まりやすい。</p> <p>何らかの不快刺激が過敏性に触れる場合は、除去するなりそちらに注意を向けられないような環境的な工夫が大切である。排泄トラブルの解決に躍起になり、無理な指導と叱責を行うことは逆効果となる。コミュニケーションや行動の強化等、全般的な支援を見直しながら、焦らず、あきらめず指導することが大切である。</p> <p>着替え... 本人の着がえに要する理解や技能的な側面を考慮して、着がえの手順にそってイメージ図や写真、文字などで知らせることが効果的な場合がある。</p> <p>入浴・歯磨き... きれいにする概念を持つことが難しかったり、その行為が本人にとって不快な場合など原因は様々であるが、一連の手続きをスモールステップで提示し、見通しをもたせやすくすること、不快な条件を除去したりできたことに対するご褒美などで理解を進めることも有効な方法である。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>生活リズム... 自閉症児には朝寝坊や夜更かし等のケースが多い。時間の概念が未習得の場合は季節や気候の影響を受けて、生活リズムが乱れていくこともある。また、こだわりと結びついた場合、思い通</p> </div>

りに食事が終了できないと次の入浴に移れないといったことがおこってくる。このような場合はスケジュールの調整が必要である。夏季の高温多湿は感覚や生理面で大きな負担となっている。空調があるだけで大きく改善することがある。また冬季は行動が不活発になる場合がある。本人の生活リズムの調査はもちろん、**適度な運動量の確保**や家族の生活状態を知ること大切であり、活動のスムーズな連鎖を妨げている要因を特定する必要がある。

<p>心理的な安定</p>	<p>この区分では、自閉症の基本的な障害や特徴的な特性である「こだわり」や「過敏性」に対する指導内容を設定した。こだわりは、問題行動と結びつく場合もあるが、学習課題と結びつける上で重要な手段としてプラス面も大きい。なくす方向だけでなく、持続的・生産的な活動に転化発展させていく指導方針は特に大切である。</p> <p>過敏性：自閉症児は情報の部分と全体を対比させたり、必要な情報を選択したりすることが難しい。そのため多くの情報を同時に処理できず、パニックとなったり、一部分に次々反応して多動や衝動的な行動となって表れることがある。</p> <p>こだわり：自閉症児には、原因と結果のような因果関係の理解が難しく、周囲の世界は混沌としてうつる。そして、雑多な情報から逃れるため、安定した刺激をつくり出そうとする。「自己刺激」、「興味の限局」、「順序へのこだわり」等の同一性保持行動は「情動が不安定になりそうな時の自己流の解決策」という大切な側面をもっている。自閉症におけるこだわりは、心理的な開放を得るためのものと異なる特異な内容を持っている。</p> <p>反復行動と特別な興味は、自閉症の定義を構成する特徴となっており、多種多様な形をとる。手をひらひらさせたり、指をくねくねと動かす。物をしきりになめる、においかぎ、奇妙な音を出すなどの常同的な行動がある。発達段階によって物を並べる、スイッチ、ひもなどへの固執、物の部分への興味などに没頭する。さらに高い発達段階では天気予報、地図などに興味を持つことがある。時間割の変更には強い抵抗を訴える場合がある</p> <p>物を非機能的に使うのを好む。物を回転させる、並べる、水遊びなど。有用なスキルや余暇スキルに置き換えることができる。</p> <p>日課や習慣、決まった段取りの変更は計画的に行い、目で見て分かる工夫等で先の見通しを知らせる必要がある。</p>	
<p>自立活動の指導項目</p>	<p>自閉症の特性</p>	<p>指導内容（配慮と手だて）</p>
<p>(1) 感覚の過敏性、不安定な情動への対応</p>	<p>感覚刺激への異常な反応 ・視覚、聴覚、嗅覚、味覚、皮膚感覚などの過敏さや鈍感さ</p> <p>気分の異常・ストレス耐性の低さ ・攻撃的行動（自傷、他害、物に向ける攻撃性）</p> <p>・過剰または過少な恐怖心 ・苦しい時に安楽を求めることの欠如</p> <p>・過度の不安感 ・パニック</p>	<p>< 支援のポイント > </p> <p>視覚に関して...光をまぶしがったり、混乱するような場合は、教室等では、直接光刺激を受容しないように間接照明にする。蛍光灯のちらつきも感覚に触りやすい。見た物に次々反応する「ビジュアルドライブ」は多動の原因となる。自閉症児に、無配慮に物を提示しておいて待たせることは誤学習やフラストレーションの元となることがある。また窓ガラスにカバーを貼る、ついたての利用等の環境設定が行動を安定させる上で有効な場合がある。直接的には、サングラスの利用を練習することも考えられる。</p> <p>聴覚に関して...(1)本人が敏感に反応してしまう音声刺激は何か、特定できる場面は、避けるような配慮をする。器具のノイズ等、通常は聞き取れないような微細な音源である事も多いので、「耳ふさぎ」の様子等をよく観察する必要がある。他の人の声を嫌がることもあり、対人関係の調整が必要なこともある。耳栓やヘッドホンなどの着用で回避する方法もある。</p> <p>(2)過敏性とは逆に、聴覚から入る音を認知し、理解して予測を立てることが難しい場合がある。音を聞いてもそれがどんな意味を持つのか、次に何が起こるのかを予測することが難しい。このような場合に、声かけによる支援は効果が少ない。視覚的な支援等、他の手だてを工夫する必要がある。</p> <p>嗅覚、触覚、味覚に対して...周囲の環境に対して、情報処理の不足している部分を補うために、においを嗅いだり、触ったりすることが考えられる。また、特定の触覚に敏感に反応してしまうケースが考えられるため、その度合いを考慮し、学習や作業などに取り組む配慮をする必要がある。少しずつ条件を変化させて偏食とも関連するが、食べ物の温度を変えたり、味付け、食感を調整すると改善することがある。</p> <p>攻撃行動...本人、他の人にとってメリットがない行為であるが重要な（自傷・他害）コミュニケーション行動を含んでいることがあるので、原因を正しく把握し解決の糸口を見つけ出すことが大切である。原因として考えられる自閉症特有の問題は、コミュニケーションの障害による欲求不満、社会的な判断力の弱さ、自己や他者への認識の欠如、感覚の異常等が考えられる。活動が難しすぎる場合はレベルを調節していく必要があるが、当然できるはずの活動では、自傷や他害を用いて努力から逃れる手段にさせないように対処する必要がある。その際も、自傷や他害とは両立し得ない行動を強化する等の工夫は必要である。</p> <p>感覚の異常...通常なら痛みのためにその動作をやめるほどのものであっても、感受性が低下していたり、痛みや刺激そのものに強い興味を抱いている場合がある。開眼した目に指を押しつける「眼球突き」は光るおもちゃ等、他の視覚刺激に置き換えることで改善することがある。</p> <p>カームダウンエリア...極度の恐怖心や不安感、ストレスなどのために混乱に陥った場合、その興奮を静めるための場所。不要な刺激物のない静かな小スペースを準備しておく。大人の介入は極力排除し、自分で落ち着きを取り戻して活動に復帰できるよう練習を行う。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・チック, トウレット症候群 	<p>センソリールーム...本人にとって、至福のひとつを味わうことのできる空間。きれいな光や好きな触覚を楽しむことができる感覚タイプの部屋とトランポリン等の運動タイプの部屋があるとよい。カームダウンエリアと違い、緊急避難的でなく、ふだんからリラックスするために利用する。</p> <p>・パロン・コーエンらは自閉症とトゥレット症候群の合併に関する研究を行い、合併の率は6.5パーセントと結論している。トゥレット症候群は自閉症と合併しやすい。自分の意志とは無関係に、突然繰り返して起こる顔・手足や体の不随意運動(運動チック)、ノドや鼻を鳴らしたり、声を出すこと(音声チック)とを主症状とする。このような場合は、生活全体を見直す必要がある。投薬が有効な場合があるので、一概に常同行動ととらえず、医師との連携を図る必要がある。</p>
<p>(2)こだわりへの対応</p>	<p>因果関係の理解が困難</p> <p>想像力の障害とそれに基づく行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・反復行動と特別な興味 ・行動の衝動性 ・普通でない興味, 興味の範囲が狭い ・常同行動 <p>・変化への抵抗</p> <p>・こだわり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自閉的空想 ・多重人格的行動 ・明らかな理由無く泣いたり, くすくす笑ったりする <p>・タイムスリップ</p> <p>・フラッシュバック</p>	<p><支援のポイント> </p> <p>強迫的・儀式的なルーティンへのとらわれに対して...自閉症児は、一定のやり方で行動を行うことを妨げられると混乱したり、強い不安を感じて問題行動を引き起こすことがある。ルーティンへのとらわれは障害の程度が重いほど強くなる場合がある。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)問題を消去する代わりに置き換える事例：スイッチやボタンの操作に関して強迫的行動がある場合、罰で消去するのではなく、スイッチ操作の責任ある係を任せることで、生産的な活動に置き換えることができる。 (2)物を適切に用いる方法を教える事例：新しいシートに変えるたびにかんしゃくをおこす子どもに対して、シート交換を本人に手伝わせることによって、シートがどこへ行くのかが理解でき、戻ってくることを予測できるようになる。また、有益なスキルを育てることができる。 (3)日付や時刻表などの情報を集めることにこだわる事例：比較的高い発達段階では、誕生日、電話帳、天気予報、コマースヤル等に強い興味を持つことがある。何年も先の曜日が分かる等、特定の分野に高い能力を示す場合は「イデオ・サバン」と呼ばれ、自閉症の特性のうちでも一般的に知られているが、一人一人のこだわりのメカニズムは様々ではない。個人の得意分野の査定を行い、指導に生かすことが大切である。 (4)ことばへのこだわり：同じ質問を繰り返し質問する場合は、すでに知っている答えを言ってほしいのが目的であることがある。答えを文字で書いたり、絵や写真を使って、自分で答え見いだせるようにする対応が考えられる。 (5)テレビ、オーディオへの興味：テレビ、オーディオの内容は予測可能であったり、繰り返し視聴できることが自閉症児の好みに合っている。音楽を高速で再生したり、ビデオの同じ場面を繰り返し見る等、通常とは異なる楽しみ方も多いが、他人の迷惑にならない範囲であれば、大切な余暇スキルに発展させることができる。 <p>自閉的空想(ファンタジー)...自閉症児に独り言や空笑がみられる時、自閉ファンタジーの中に居ることがある。自閉症児にとって、現実の世界は耐え難いストレスに満ちているので、それに耐えるため、また、それを不満として表現することを経験的に抑える為に、ファンタジーの世界で時間が過ぎるのを待っていると考えられる。ファンタジーという自衛手段を奪うのではなく、時と場合を判断してそれを調整するスキルを教える必要がある。</p> <p>タイムスリップ現象...自閉症の記憶の特異性として、時間の流れを無視して現在の状況とよく似た感情的な場面のフラッシュバックが生じ、再体験されることがある。強い不快な体験を重ねることで、些細なことでも不快刺激となり強度行動障害の状態になることがある。指導において極力強引にならないよう配慮する必要がある。例えば、叱られると、攻撃されたこととらえ、暴力で反応してしまうことがある。この場合、叱られた時に反省できる構造を作る事が大切である。認知・判断の部分を練習せずにそのままにしていると、感情で動くようになるので、判断をして行動する力を育てていく必要がある。選択性セロトニン再取り込み阻害剤(SSRI)のような薬剤が有効な場合があるので医師との連携を図る必要がある。</p>
<p>(3)障害の受容と自己理解に関すること。</p>	<p>障害の自己理解の困難</p>	<p><支援のポイント> </p> <p>障害の受容と自己理解... 障害そのものに関して指導内容とすることは、本人の知的・心理的状況を考慮し、保護者や関係者との十分な協議の上なされなければならない。 しかし知的機能レベルにかかわらず、自分自身の得意・不得意なことを知り、困難な状況に対処するスキルの獲得(たとえば、パニックになりそうときは深呼吸をする等)への援助は常に必要である。いろいろな場面や状況を乗り越える方法について、本人の特性に応じて、ふだんからさりげなく指導しておく必要がある。 高機能自閉症の児童生徒に、自閉症である旨を知らせる時期は、本人が疑問を持ち、本人から要請があった時が適当と考えられる。その際、自閉症がどのようなものであるか、簡潔・明確に、順序立てて伝え、くれぐれもマイナスイメージをつくらぬ努力が必要である。また、本人の努力だけでなく、社会一般に対して、自閉症への認知度や理解を高め、サポートするシステムを構築する必要もある。</p>

<p>環境の把握</p>	<p>自閉症児は、自分を取り巻く環境の認知に困難を有している。そのため、自分に何が期待されているのか、自分は今何をすればよいのかがわからず混乱してしまうことがある。そのような自閉症の児童生徒に対しては、自分が今何を求められているのかを明確にするために環境を再構成（「構造化」）してアプローチする方法が効果的である。</p> <p>構造化のアイデアには、物理的構造化 スケジュール ワークシステム 視覚的構造化などがある。</p> <p>自閉症は、他からの刺激に左右され、注意を集中させることが困難であったり、細部にとらわれ、必要な情報を理解することができなかつたりする。明確に教室などの環境を区切ることで、余計な刺激に不必要に刺激されることが減り、今すべきことへの集中を助けることができると考えられる。また、活動と場所を1対1にし、明確に仕切ることで、その活動の「はじめ」と「終わり」を理解することを助ける。</p> <p>自閉症児は、予定の立たない状況で次々に指示をされたり、自由時間を与えられすぎたりすると、強い不安を感じる場合が多い。また、予期しない場面に出くわすと、激しい混乱に陥りやすい。「心理的な安定」ともかかわりが深く、生活のスケジュールを予告し、時間的な援助をすることによって、安定した生活を送ることができる。また、生活スケジュールを予告できるように、日常生活の日課や習慣を確立することも予告と同じような意味合いがある。スケジュールを理解することで、見通しをもった行動が期待され、指示待ちの態度の形成を予防し、自主的に行動する練習になる。「物事を終了する」「終わる」という理解が苦手な自閉症児に対して、継続的に「終わり」を提示することによって、活動のメリハリをつけることができる。また、ワークシステムにより、それぞれの児童生徒の終了の概念を知ること、他の様々な場面で、活動の終わりを知らせることができ、児童生徒が安心して活動することを援助することができる。</p> <p>自閉症の視覚優位という特性は、「視覚的にわかりやすく提示する」という視覚的構造化を配慮することにより、より指導の効果を期待することができる。</p> <p>自閉症児は、どうしてそうなったのかという物事の因果関係や次に何をすればよいのかという順序の理解が難しい。物事の関係を理解しやすくする構造化や視覚化が必要である。また、始めと終わり、時間の概念の理解が難しく、特に終わりを理解することは問題行動解決のキーポイントになることがある。</p> <p>「構造化」の内容については、言葉の意味や言葉の表す状況を理解することが困難である自閉症児にとって、構造化の手法を使って「周囲で何が起きているのか」「次に何をすればよいのか」ということを、わかりやすく示すことは、意味の理解を援助することとなり、受容性のコミュニケーションを高める指導との関わりが深い。何をねらいとするか教師が明確に焦点を絞っておく必要がある。</p> <p>「構造化」の考え方をつかって援助することにより、周りの環境を理解することが促され、指示を待ち行動することが多い自閉症児が、教師の指示や監督がなくても、自主的に活動する範囲が広がることが期待される。「構造化」は、自閉症の人が安心して、自信を持って活動できるようになることにつながると言えよう。</p> <p>「構造化」の程度は、それぞれの認知発達水準の程度や自閉症の障害の程度により異なってくる。認知発達や自閉症の程度の重い児童生徒には、厳密な構造化が必要だと考えられるが、認知発達の高い児童生徒や自閉症の障害の程度の比較的軽い児童生徒にとっては、次第に構造化を緩めていく必要がある。</p> <p>自立課題とは、広い意味では、「自立」を高めるために「構造化」されていれば、生活の中にあらゆるところに「自立課題」が用意されていることになる。狭い意味での「自立課題」とは、「机に向かって一人で行う課題」のことであり、この中には、それぞれの自閉症児をどう支援するかというとても重要な要素が含まれていると考えられている。</p>	
<p>自立活動の指導項目</p>	<p>自閉症の特性</p>	<p>指導内容（配慮と手だて）</p>
<p>(1)認知や行動の手がかりとなる概念の形成に関すること</p>	<p>認知発達の異常</p> <ul style="list-style-type: none"> ・模倣することが困難 ・比較、関係の理解の困難 ・統合能力、抽象能力の弱さ ・認知発達のアンバランスさ <p>シングルフォーカス(注意の異常)</p> <p>記憶に関する能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・短期記憶が弱い ・長期記憶が強い ・作業記憶が弱い <p>因果関係の理解が困難</p> <p>視覚優位の情報処理</p> <p>時間に関する能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間のアナログ的な捉え方が苦手 ・予測、先読みの困難 ・おわりの概念が理解できない 	<p><支援のポイント></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>[空間的援助]</p> <p>物理的構造化...部屋や活動場所を衝立や家具などで区切ることで、活動に集中しやすい環境を作る。学習、遊び、集団活動など活動の内容と場所を1対1で対応させる。</p> <p>例) 教室環境の構造化、教室とその機能を1対1に対応させる。 ワークエリア(学習や作業の課題に取り組むための場所) プレイエリア(遊びや休息のために過ごす場所)など</p> <p>移動のシステム...一つの環境(学習や作業)から別の場面に移行する際に困難や混乱を示す児童生徒に対して用いられる。実物や写真、絵、文字カードなどを用いて自主的に移動できるようにする。</p> <p>例) トランジションエリア(スケジュールを確認するための中継地)に移動するために必要な情報を実物や写真、絵、文字などを使って提示する。それらの物やカードをマッチングできるようにしておくとう理解しやすい場合が多い。</p> </div> <p><支援のポイント></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>[時間的援助]</p> <p>スケジュール...個々の児童生徒の理解できる方法で、次の活動の内容や1日の流れを知らせる方法。提示の方法については、具体物やイメージさせる図や絵、写真、文字などの視覚的な手がかりを用いた方が有効である。時間割に当たる全体のスケジュールの他に個別のスケジュールの提示が必要な場合がある。</p> <p>例) 上から下に、左から右へなどの視覚的な構造化を用いて、予定されている活動内容、場所等をイメージさせる文字や写真、絵などを順序立てて並べておく。</p> <p>例) 全体、個別、パートタイム、など</p> </div> <p><支援のポイント></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>[手続的な援助]</p> <p>ワークシステム...学習、作業をする場所で行う課題の内容や量、いつ終了するか、さらに、終了後どうするのが理解できる方法をとることにより、1人で行動することを助ける。</p> <p>例) 左から右へ、色、数字やアルファベットなどのシンボル、文字などによるシステム</p> <p>例) ワークシステムを利用し、「自立課題」を設定する。</p> </div>

		<p>視覚的な構造化...一般的に視覚認知が優れているという自閉症の児童生徒に対して、視覚的な手がかり（文脈や場面、1対1対応、上から下へ、左～右への系列）の提示により課題の進め方を教える工夫をする。ワークシステムに関連して、終了後に本人の好む活動やものを準備することで、一層意欲と見とおしを持って取り組むことができる。</p> <p>例) 文脈や場面を提示する：「歯を磨きなさい」洗面所に連れて行き、ハブラシを渡す。</p> <p>1対1対応：10本ずつ箱詰め 10カ所に1本ずつ置いていき、その後箱に詰める。</p> <p>左から右：ボルトナットの組み合わせ作業 作業をいつも左から右に進めていくことを習慣にしておき、左から順に材料を取り、組み合わせると右に置く。</p> <p>ジグ（絵、図、写真、文字などが単独あるいは組み合わせで用いられた補助教材）：5種類の材料を袋詰めする それぞれの材料の形が描かれたボードを使い、その絵の上に材料を並べて、そろったところで袋詰めをする。</p>
--	--	---

<p>身体 の 動き</p>	<p>自閉症者の身体の動きにおいて、身体動作の協応が困難である、不適切な動きが見られるといった特徴があげられる。</p> <p>運動発達における特徴として、協調運動の困難さや断片的発達があげられる。発達原則に基づいた運動指導、1) 運動発達に必要な基礎的感覚入力調整、2) 身体発達の順序性を踏まえた基礎運動技能の経験が有効である。</p> <p>粗大運動において次の特徴があげられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活力と筋力の欠如 ・平衡運動の拙劣さ ・障害物を扱う際の不器用さ ・運動に関する速度と強度のコントロールの不十分さ ・統合された粗大運動活動を、体全体で組織化することの困難さ <p>総合的な個別教育プログラムのために構造化された枠組みを設定して、粗大運動発達プログラムを行うことで、身体知覚や身体と環境との関係の知覚を発達させることができる。</p> <p>姿勢や運動の異常として、身体の硬直化や弛緩、特異な指の形や全身の姿勢、身体を揺する、くるくる回るなどの常同行動、指をくねらせる、つま先立ちで歩くなどが見られる。これらの行動は、感覚刺激への過敏さや認識の弱さによる運動パターンへの固執などが原因として考えられる。</p>
-----------------------	--


自立活動の指導項目	自閉症の特性	指導内容（配慮と手だて）
<p>(1) 姿勢と運動・動作の基本技能に関すること</p>	<p>姿勢・運動の異常</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つま先歩き。 ・独特な歩き方、走り方をする。 ・身体の硬直化や脱力化。 ・特異な指の形や全身の姿勢。 ・身体を揺する、くるくる回る、指をくねらせるなどの常同行動。 	<p>< 支援のポイント ></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>・基礎的感覚入力の調整・・・ハンモック、トランポリン、スクーターボード等を使った遊びを通じた上下・左右の揺れ、回転などの刺激によって姿勢や重心安定を促進する。一方では、触覚のための教材を工夫して体性感覚の調整を図ることも、運動発達に関連している皮膚の過敏反応の抑制や、筋収縮の活性化に有効である。</p> <p>感覚統合法・・・エアーズの理論から構築された指導法であり、自閉症者に対しても、触覚・固有感覚・前庭感覚への働きかけを重視し、感覚運動指導を通じた身体像・身体図式の発達を図ることを目指して取り入れられている。</p> <p>・バランス、協調運動の指導・・・四つ這い・普通歩行・後ろ歩き・両足跳び・ケンケンなど身体発達の順序性を踏まえた基礎的運動技能の指導を行う。そして、手・体幹・脚の協調や、音楽等の外界からの刺激に対する協調を必要とするリズム運動やサーキット運動へと指導を進める。運動の模倣ができない時には身体に触れ、具体的な動作を指導していくことも大切である。より高次の課題としては、～しながら～できるといった複合的な運動ができることも指導内容となってくる。</p> <p>・慢性的な姿勢の緩和・・・常に何らかの感覚を必要とすることから、また絶対的な運動量が足りないことから結果として膝や足首・上体が屈曲優位になってしまうことがある。拘縮や関節の可動域の減少がおこることも考えられるので、全身の柔軟運動やストレッチ、自己弛緩訓練といった身体を十分に伸ばす指導が必要である。</p> </div>

自閉症の特性に対する自立活動の内容表

<p>コミュニケーション</p>	<p>「偏ったコミュニケーション」はウィングの三つ組みの症状のひとつである。コミュニケーションの障害として、話し言葉の発達遅滞や欠如があるのに、代わりにコミュニケーションの様式であるジェスチャーや身振りを用いて補おうとしない、相互に反応し合う会話を開始あるいは維持することが困難、常同的で反復的な言語の使用、言葉の調子、強さ、速度、リズム及びイントネーションの異常、ごっこあそびの乏しさなどが挙げられる。また、高機能自閉症では、言葉を字義通りに解釈したり、丁寧すぎる言葉遣いや細部にこだわった話し方をし、TPOに合わせて調節することが困難であったり、非言語性のコミュニケーションに偏りがあり、視線や表情、身振りを適切に使うことができなかったりする。</p> <p>言葉が乏しく、未熟な場合には、問題行動は、「ことばにならないことば」であるコミュニケーション行動と捉え、注目の獲得、嫌悪事態からの逃避、物や活動の獲得、感覚刺激の獲得等の機能を果たしていると言われている。対象となる問題行動がどの機能を果たしているかを分析し、その問題行動と同じ機能を持つコミュニケーション行動を形成することによって、問題行動が減少する場合が多い。</p> <p>コミュニケーションの指導は自閉症の特性から、受容と表出の2面から考えることが大切である。</p> <p>受容性コミュニケーション</p> <p>コミュニケーションを育てるためには、まず相手の伝える意味や周囲の状況の理解ができていなければならない。これら受容性のコミュニケーションを高めることがまず重要になる。自閉症児は、ことばや非言語的なコミュニケーションが、ある意図を持って自分に向けられていることを理解することが難しいため、「子どもが分かるように提示する」必要がある。それぞれの個に応じたレベルを知り、構造化（物理的構造化やスケジュールの提示など）をすることで環境を分かりやすくし、理解を助ける必要がある。</p> <p>表出性コミュニケーション</p>
-------------------------	--

自閉症児の多くは話し言葉を獲得できていなかったり、話し言葉があってもコミュニケーションの手段として使えなかったり、即時性・遅延性エコラリア、人称の逆転など表出の特異性をもっている。また、自閉症児では、コミュニケーションをすることの意味や意義を理解できない場合がある。現在所有している技能を使ってコミュニケーションスキルを高め、便利さや楽しさを感じることができるようになり、コミュニケーションをしたい気持ちや意欲を育てることが大切である。対象の子どもがそれぞれの場面や状況において、どのような方法で意思伝達をしているかを行動観察を通じて把握することによって、適切な目標を設定することができる。その手段としては、コミュニケーションサンプルを取る方法がある。指導の方法として、構造化された場面における指導、偶発的な場面における指導、意図的な環境を用いる指導等がよく利用される。

自立活動の指導項目	自閉症の特性	指導内容（配慮と手だて）
<p>(1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること。</p>	<p>偏ったコミュニケーションの発達（因果関係の理解の欠落、注意の共有ができないことからくる）</p> <ul style="list-style-type: none"> ことばの遅れ エコラリア 人称の逆転 疑問文による要求 アイコンタクトが取りにくい 	<p>支援のポイント 身近な人との関係に慣れる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 大人からの簡単な身振り、サインの意味を理解し、それに応じる。 子ども同士の簡単なかわりに慣れる。 <p>（認知レベルが1歳以上で模倣ができる段階であると少人数での集団活動を利用することができる。） （自閉症の子どもが親しみ慣れた環境に健常な子どもを招き入れ、交流を行う。）</p> <p>・自閉症児にとってのコミュニケーションは、単にことばによるやりとりをさすのではなく、何らかの方法を使って、意思のやりとりができることを学習する必要がある。よって、ことばの使い方を指摘する前に、意思の伝達が的確にできるかどうか主眼をおく必要がある。</p> <p>エコラリア：エコラリアは、音声言葉を増やすための基礎と目安になる。場面に応じた言葉を促す時に、エコラリアを利用することができる。即時エコラリアと遅延性エコラリアがあり、多くの場合、自分に話しかけられている言葉の意味が理解できず、しかも応答が求められているような場面で見られる。エコラリアが使われている機能を正しく捉え、指導する必要がある。</p> <p>物を見る、アイコンタクト：コミュニケーションをとるときに、相手が示した物をきちんとみたり、働きかけてくれる人に注意を向けたりすることが必要である。視線を合わすことが過剰な刺激となる場合があるので、目を合わせずに横にいる等、配慮が必要な場合もある。</p>
<p>(2) コミュニケーションの受容に関すること</p>	<ul style="list-style-type: none"> 言葉の意味の理解が難しい。 会話の中での言語受容は、表面的な意味理解にとどまることが多い。 	<p>子どもにとっての適切なレベルでのコミュニケーションを指導する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象指示活動の基礎を作る（指さしの理解）。 ものに名前のあることの意味を認める。 身振り、サインの理解を認める。 簡単なことばがけの意味を理解しそれに応じる。 指示したことや説明したことを復唱したり聴写させたりすることで理解を認める。 心情面への理解が難しいことに対して配慮する。 「環境の把握」の区分とのつながりが深く、個に応じた理解のレベルを知り、具体物、絵や写真、文字のカード、サインやジェスチャーを利用する。
<p>(3) コミュニケーションの表出に関すること</p>	<ul style="list-style-type: none"> 問題行動として表れる場合がある。 注目の獲得 嫌悪事態からの逃避 物や活動の獲得 感覚刺激の獲得 	<p>日常場面で児童生徒が持っているコミュニケーションスキルと問題点を明確に把握し、適切な目標を立てる必要がある。</p> <p>評価の方法としてコミュニケーション・サンプルが挙げられる。 日常的活動をしている場面を教師が観察し、それを分析し、次の5つの次元について児童生徒が現在示すスキルを評価する。 機能：（要求・注意喚起・拒絶（拒否）・説明・情報提供・情報請求・その他の感情や共感の表現（交換）） セマンティック・カテゴリー：表現された意味に関する分類。例えば物、場所、動作、人など。 言語：文字、絵、身振りなどコミュニケーションに用いられるあらゆる手段。 形態：コミュニケーションする場合の方法や様式。 文脈：コミュニケーションが成立している場合の場面や状況のこと。</p> <p>指導の方法として、</p> <ul style="list-style-type: none"> 構造化された場面における指導：一つの場面で一つのスキルを集中して教える。認知レベルの低い自閉症児には、日常的に多用する品物や実用的な具体的活動を利用して指導を進めていくことが効果的である。 偶発的な場面における指導：日常的に起きる出来事の中でコミュニケーションを教える。 意図的な環境を用いる指導：コミュニケーションが必要な場面を計画的に設定して教える。 <p>・問題行動に対処する場合には、その行動が何のためにされているかを把握し、適切な方法や手段を教えるようにする。また、過剰に反応するなど、その行動に強化を与えないようにする。</p>
<p>(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること</p>	<ul style="list-style-type: none"> 具体物、絵、ジグ、写真、文字などは理解しやすい。 	<p>一人一人のニーズや特性に合うVOC Aでの活用を図る。VOC Aを利用する時には、必要なスキルについて事前にチェックしておく。</p> <p>必要な情報を的確に得るために視覚的なツールを利用する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童生徒のコミュニケーションレベルに応じた絵や写真、文字のカード、具体物、サインやジェスチャーの利用。 シンボルカードを利用して場所の表示をする。 シンボルカードを利用して時間割の表示をする。 ことばを的確に代弁してくれる音声ツール（VOC A）を利用する。 表示できるメッセージの数を考えてVOC Aの機種を選択する。 VOC Aやサインを使つての要求や報告に対して、十分な受け入れをし強化していく。 <p>音声言語は、社会生活を送る上でもっとも一般的なコミュニケーションの手段である。そのため音声言語と結びつける方向付けが必要で、非言語性のシステムを活用することで音声言語の理解や表出の伸びが期待できる場合がある。</p>

<p>社会とのかかわり</p>	<p>この区分は、自閉症児の社会性に関わる指導を集約的に行うため、本校が仮説的に設定したものである。「ソーシャルスキルに関すること」「社会生活上のルール理解に関すること。」に加えて、学習指導要領の「状況に応じたコミュニケーションに関すること。」「対人関係の形成の基礎に関すること。」に関連する内容も含めて分類・整理している。</p> <p>社会性の障害は DSM- (精神障害の分類と診断の手引き：米国精神医学会)の診断基準や Wing の3つ組みにおいても、基本的な障害の一つとなっている。DSM- では「社会性(対人的相互反応)の障害」に関して、次の4つの診断基準を設けている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 目と目で見つめ合う、顔の表情、身体の姿勢、身振りなど対人的相互反応を調節する多彩な非言語性行動の使用における著名な障害 2) 発達の水準に相応した仲間関係を作ることの失敗 3) 楽しみ・興味・成し遂げたものを他人と共有することを自発的に求めることの欠如 4) 対人的・情緒的相互性の欠如 <p>こうした自閉症者の社会性に関する障害を考える視点として、その背景を説明しようとする「心の理論」がある。この理論によれば、未だ仮定であるが、他者の意図に沿った社会的な行動ができない原因は、他者が何を考え信じているか読みとれない、「マインド・ブラインドネス」にある。また、幼少期に大人と喜びを共有するため、興味あるものを熱心に求めるといった共同注意行動(ジョイントアテンション)が欠如していることも、関係すると考えられている。</p> <p>これとは別の自閉症の特性の1つに「シングルフォーカス」、同様の表現として「モノトラック」がある。これは2つ以上の事柄を同時処理することの苦手さを意味する。社会的なルールや社会的交流については、その時々々の環境や前後の意味合いなど複数の要素を処理しなければ、状況理解が難しい。このことは自閉症児の行動を般化する上で大きなさまたげとなっている。自閉症児では、環境や相手の発信する刺激の一部だけに反応してしまうため、結果的に不適切な行動や誤解が生じてしまうことがある。この一面性のために、自閉症児の行動は自分勝手に社会的に不適切な行為として受け止められることも多い。</p> <p>自閉症者の「社会性の障害」は、幼少期から成人期に至るまで、社会生活を営む上で非常に重大且つ広範囲に及ぶ。また、この障害については、知的発達水準が高ければ回避できる問題もあるが、基本的にすべての自閉症児に関連していると考えられる。このような自閉症児の「社会性の障害」には、ある系統性に沿って教えることが難しい問題も多く含まれている。すなわち、自閉症以外の児童生徒にとってソーシャルスキルは基本的な手段として、教科等の系統性の中で教える内容といえるが、自閉症児にとっては、自立活動の中でいわば代替的なスキルとしてケースごとに指導していくのが妥当な場合があると考えられる。</p> <p>対人関係においても他の人が自分とは違う信念を持っていたり、欲求があったり、自分とは別のことに興味を持っていることを知らせるために、コミュニケーションのもつ「人を動かす機能」を向上させ、人と経験を共有できること、そしてそれは楽しいことだと気づけるよう援助する必要がある。</p> <p>自閉症の児童生徒は習慣(ルーティン)の予測可能な所を好むので、「習慣的な共同活動」は、対人行動やコミュニケーションに関する強力な手段となる。遊び、身辺処理、社交の場面、家庭・地域生活等の場面で本人に予測のつく明確な条件下で対人的な活動を行う中で適宜指導を行うことが有効である。</p> <p>将来問題になりそうな行動に早期から対応するよう、ルールをその人に理解できるような方法で明確にする。その上で、ルールを守る態度や、適切な行動をとることについて指導する必要がある。また、自閉症児にとってのルールとは、「学校は学習する所である」「教師とは学習を援助する人である」といった、通常は当然の前提と考えられるような条件さえ指導しなければいけない場合があることを考慮しておく必要がある。</p> <p>般化の困難な自閉症児にとって、擬似的な空間で行動スキルを身につける練習を積み、実際の場面で学んだことを発揮できるように望むよりも、初めから実際の場面でその状況に応じた行動様式を身につける方が効果的である。また、般化に関しては自己決定としての「選択」を冒頭にすえて指導プログラムを計画し、繰り返し選択の経験を積むことが大切である。</p> <p>自閉症者が社会のなかで自立していく上で、余暇と職業的活動は重要な位置をもつ。この場合、余暇とは趣味や好きなことを行う「余暇活動」という意味だけでなく、オン・タイムに対するオフ・タイム、自分のために過ごせる時間の使い方という意味も考えていく必要がある。自閉症児がワークシステムにそって課題を行う時、成功感の持てる充実した時間となるため、生き生きとして自主的な姿を見せることについて、「Work is play.」といった言い方がされる。休憩と遊びが自然に結びつきやすい他障害の児童生徒に比べ、自閉症児では遊びや休息についても指導内容としてとりあげる必要がある。</p> <p>職業的活動は、余暇と表裏一体の関係にある重要な指導内容である。見通しの立たない問題や予期しない出来事がおこりがちな進路先で自立的な生活をおくるためには、10歳前後から将来を見通した計画を立てていき、障害特性に基づいた根気強い支援を行うことが必要である。</p> <p>本人の理解の程度にあわせて明確な指示や練習を計画することが重要なポイントであるが、個人の努力には限界がある。特に職業や進路の選択にあたっては、自閉症者の社会参加の難しさへの理解、適切な援助や障害に対しての理解を高めるため、環境調整といったかたちで発信を行うことも重要な視点となる。</p>	
<p>自立活動の指導項目</p>	<p>自閉症の特性</p>	<p>指導内容(配慮と手だて)</p>
<p>(1) 社会生活を送る上で必要となる能力(ソーシャルスキル)に関すること。</p>	<p>偏った社会性の発達 シングルフォーカス 原因と結果の理解の困難 マインド・ブラインドネス</p> <p>対人相互作用の問題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不自然で自己流のスキル ・スキルのレパートリーが少ない ・スキルの融通が利かない 	<p><支援のポイント> </p> <p><社会生活を営む上での行動様式の獲得></p> <p>スキルのトレーニングにあたっては、日常生活の中で繰り返したり。偶発的な機会をとらえる方法だけでは十分でない。意図的に場面を設定した指導は重要で、両者を計画的に行うことが必要である。</p> <p>(例) 愛着対象の形成。身近な人が障害を受容することで問題行動が減り、安心感を与えることができる。</p> <p>(例) マニュアルの理解。TPOにあわせたスキルを環境を構造化して指導する。交通ルール、交通機関・公共の施設の利用、礼儀作法など。</p> <p>(例) 「質問スキル」「会話スキル」「傾聴スキル」「謝罪スキル」「主張スキル」「拒絶スキル」を身につけ、場に応じてどのようなスキルを組み合わせればよいかを指導する。</p> <p>(例) 「仕事をしている人を手伝おうとする」「友だちを待つ」「戸を開けたら、閉める」「順番の最後の人が片づける」「おやつを友だちと分ける」「適切な声の大きさ」「困っている人に声をかける」「友だちと歩調をそろえる」等、ルールの理解とも関わっているが、常識として自然に育つと考えられるスキルが身に付きにくい。</p> <p>学習指導要領の各教科、道徳等に関して例示されている内容のすき間を埋めるこれらのスキルも自閉症児に対しては一つ一つ根気よく教える必要がある。</p> <p>余暇... 注意の集中が短い自閉症児に対しては、授業時間全てを学習に専念する時間とするのではなく、個別スケジュールや構造化によって、学習・休憩の切り替えを短いスパンで適切に行えるよう援助することも必要である。</p> <p>自閉症児では、ごく短時間の活動しか楽しめない場合があるので、余暇活動についても、できるだけ長い時間を過ごせる活動を見つけていく必要がある。その場合、家族の希望を取り入れたり、家庭生活に般化する視点が必ず必要である。</p> <p>職業的活動... 歴年齢の小さいうちから家庭や学校で習慣的な役割を持っていることが</p>

大切である。「合図や時間に合わせて活動を始める」「困った時に援助を求める」等のスキルや交通機関の利用等、将来を見越して計画的に指導していく必要がある。

<対人関係の形成の基礎に関すること>

人との関わりのレベルを、「接近の程度」「並行遊び」「ものの共有」「相手との協調関係」「役割交代可能」「一定のルール理解」「相互作用」という観点で区別し、いま対象児がどの状態にあるか把握することが必要である。

- ・ 役割交代できないからといって、すぐさま役割交代ができるように指導することが適切でない場合がある。人との関わりのレベルが役割交代可能より低い状態では、役割交代の指導そのものが現在のレベルに則さない指導内容となる。
- ・ 子どものレベルに応じた指導を通じて、適切な社会的行動や人との係わりへの興味、関心、必要性を高めることができる。レベルに応じた指導を行う人への信頼感が生まれ、自発的に人と係わりたいという意欲を高めることができる。

ほめことばは、強化子として有効な手段であるが、人との関わりに関心が低く、言語理解に問題のある自閉症児にとってほめことばの意味を理解できないために、強化子として成立しない場合がある。そのために、ご褒美として直接的な物や関わりが強化子として成立する場合がある。ご褒美とことばとの併用でほめことばの理解を高める方法もある。

<状況に応じたコミュニケーションに関すること>

集団生活を営む上で、からかいやいじめが許されない雰囲気や環境、本人の得意なことなどを賞賛されるような環境作りが有効。

不自然なことばや文語的な言い回しに教師が意表をつかれてしまうことがあるが、将来のことを考えて適切に修正していく必要がある。また、奇妙な言動に対して笑ってとりあげる等、過剰に反応すると、笑ってもらったという反応のおもしろさだけにひかれてさらに突飛な言動につながることもある。悪循環に陥る前に消去していく必要がある。

集団活動を取り入れる際に、順序として少数の相手と簡単な社会的なゲーム等のやりとりで基本的な対応を身につけて、徐々に対象を増やしていく方法が有効である。その際も、構造化等によりコミュニケーションの支援を行っていく必要がある。

高機能自閉症児では、相手の苦しみを理解できないので、思ったことをそのまま言って反感をかうことがある。ロールプレイングを通して小集団でのディスカッションを行い望ましい言動を理解していく指導が考えられる。トラブルが起こった時だけでなく、意図的に様々なロールプレイを行ない、適切な対応のレパトリーを広げていくことも大切である。

<支援のポイント>

<社会生活上のルール理解に関すること>

写真・絵・文字によるルール理解
全体を統合して見ず、部分的な情報に注目したり、周囲の環境や状況が何を求めているか分かりにくいといった障害特性を持つ自閉症者に対して、視覚的構造化等により、見て分かる支援を行うことは、環境や行動の枠組みを明らかに示す上で大切である。身近な環境を予測可能で理解しやすいものにするには、問題行動を最小限にし、自立のためのスキルを習得しやすくする。写真・絵・文字等の活用は、コミュニケーションや環境の把握の面から、自閉症児にとってもっとも基本的な支援といえるが、自律性(ひとりで行える)自発性(自分からできる)といった社会的自立を促す指導においても重要な手だてである。

個人内レベルでは、それぞれの遊び行動であっても、社会通念上遊びと捉えられず、指導対象になったり、問題行動とみられることもある。本人側からすると、通念上の遊びという概念そのものが理解できず、ルールや見通しがもてないことに原因がある。このことを十分に踏まえて、遊びや余暇の手だてを指導する必要がある。指導の際は、ルールや流れが理解できるような明確な提示の仕方が必要である。また問題を含む遊び行動に介入する場合は、代替行動を準備しておかなければ、別の問題行動として表れることがある。

(例) 趣味を広げ、成人期には興味を生かした余暇活動につなげるようにする。

チェックリストを利用した強化
児童生徒の行う課題の内容をチェックリストにまとめておき、課題が終わったら自分でチェックし、指導者がそれを確認したり承認したりするようにしておく。課題ができたという達成感や指導者の承認は強化子として働くので、チェックリストに従って課題を行う行動は強化されることになる。児童生徒の特性によっては、さらに分かりやすいご褒美が必要となるが、チェックリストとトークンエコノミー法を併用する等、いろいろな利用の仕方を工夫することができる。

トークンエコノミー法
社会生活をおくる上で、労働・報酬の関係を理解することは大変重要なことである。作業や課題終了後、ご褒美として好きな活動やものがもらえるということは、この考え方の基本に当たる。
このシステムに習熟すると、1つ作業や課題、約束の実行から即ご褒美をもらうのではなく、それに代わるシール等を数枚集めて、望むことができたり、品物をもらうという方法がとれる。代替の機能を持ったシール等を「トークン」という。
自閉症児にとっては特に、自分なりの取組みに対しての見とおしを持つことができる有効な方法である。また、トークンのやりとりは、社会における貨幣経済にも類似しており、職業や進路に関わる指導内容と結びつけることが可能である。

人の気持ちや感情を推測することが困難な自閉症児にとって、実際のトラブルの状況下では、本人の気持ちの高ぶりなどから、指導が困難になる要素が大きい。自分の行動を振り返らせる等の指導では、問題点が分からずかえって混乱が増すこともある。このような場合は、まず本人に分かる方法で問題解決方法をはっきりと知らせる必要がある。また、本人が落ち着いている状態で、「こうすればいいんだ」という情報が記された視覚的な情報提供を行う方法もある。

(例) ソーシャルストーリーズ
自閉症者の見方、考え方にそって、特定の社会的理解について情報提供を行う方法。アメリカのキャロル・グレイが考案。ストーリーとして紙に書かれ、自閉症

- ・ 人への関心が乏しく孤立しやすい
- ・ 多彩な対人的交流が苦手
- ・ 表情の理解が難しい
- ・ 視線の認知が難しい

- ・ ごっこ遊びが難しい
- ・ 不自然な言葉づかい

(2) 社会生活上のルール理解に関すること。

社会生活上のルール理解の困難

- ・ 常識の欠如
- ・ ことばを字義通り受け取る
- ・ 恥ずかしさや周囲の迷惑が分からない
- ・ 否定感に対する拒絶
- ・ 勝ち負けに対する固執
- ・ 失敗への過剰反応

- ・ 感情を理解したりコントロールしたことの困難

・適切な社会的距離が理解できない

児がそれを読むという形態で使われる。「社会物語」と訳される。

自閉症児は、人との距離を適切にとることが苦手で、じっと見つめたり、人にしつこく迫ったりするすることがある。「5秒以上見ない」「1メートル離れる」等、具体的な基準を示して指導する必要がある。